

「短歌人」
2009 / 4月号
70周年記念号

Book Review

『爽竹桃と葱坊主』 内藤明歌集

寡黙な歌人である。この歌集でみるかぎり作者は東京近郊に棲み、都心の大学に通勤する教職者のようだ。娘さんが複数いる家庭をもっているらしいがさだかではない。はっきりしているのは猫好き、酒好きで、チャリンコの愛好者であることくらいだ。自己を語ることはあまり好きではない。控えめな性格なのである。しかし、だからといって、歌の背後に浮かぶ作者の存在感が稀薄というわけではなく、明確な意思をもつ知的な人間としてくっきり描かれている。それは「肩の力をすこし抜きながら、しかしどこかに芯の通った歌をつくりたい」という歌集の「あとがき」にも示されている。

食卓に茄子とゴーヤと皿があり写生されたるかたちのままに
あやまず咲きはじめたる花の木をうしろへうしろへ自転車を漕ぐ
コンタクト外すを見れば人体の内部晒して人体はあり

独得の視点からうたった歌が印象的だ。

（六花書林 千一七〇〇〇五 東京都豊島区南大塚 三三四四一四 電話〇三五四九一六三〇七 定価七〇〇円八税別）
（長谷川莞爾）

『改命』 大津仁昭歌集

天蓋のモザイク一つ抜け落ちてそこより空が始まりし頃
この一首から始まる本歌集は、まるで長編の叙事詩のようでもある。
神々の存在は強く意識され、宇宙と地球、海と陸、生と死、人類と動植物、現世と来世……。はるか昔、地球が生まれた頃の、全てが渾沌とした神話のような世界が描かれる。
真輝く肉体が来て処女たちは夜の被爆に目を見開けり
青葉闇蝶々はもつれ消えたるをそのかみ
愛の在処と知らず
黄泉にては何語を話す朝焼けの葉擦れは昔聞きたる言葉
来世には次まで見えむ日焼けせる少女ひとまづ太刀魚となり
神社へと入口消えし晩夏よりさればと辿る母の産道

破壊され続けている現在の地球は作者の自己改変の力によってこそ再生される。そう信じて紡がれた三二五首、第七歌集である。

（邑書林 千三八五〇〇〇七 長野県佐久市新子由九一 五一一 電話〇六七六六六一六八一 定価七三〇円八税別）
（真狩浪子）

『S坂』 森尻理恵歌集

「何ですか」と聞かれたときに言うせり
ふ「国の仕事で地盤の調査」
道端にしゃがみこんでは重力を測り測りぬ二百点ほど
ビクター用のカードキー首から提げたまま昼食のうどん待つ列にいる
作者は地球科学の研究者である。地球が相手だからフィールドワークもあり、息子を親に託し、あちこちの地盤調査に赴いている。
歌集から働く女性と母親の葛藤も見えてとれる。
鉛筆を毎日失くす子を叱る盗られてとれるなら嫌だと言えと
つつましく暮らしていればそれなりに肩書きにわれは護られており
五つ六つ懸案事項の重なりでクレンザーをまた買い忘れたり

しかし、この大変さは読む者に元気をくれる。歌を味わいながら未知の世界への知的要求も満たしてくれる。タイトルは「S坂は鷗外が付けし名と知らず地震研まで幾度も通いぬ」から。この坂は東京・文京区根津にある。
（本阿弥書店 千一〇一〇〇六四 東京都千代田区猿樂町二一八 三車ビル 電話〇三三三九四一七〇六 八 定価二七〇円八税別）

（蜂須賀裕子）